

桐小箱

その昔、書類・衣類・小物類の保存には、竹筒が利用されていましたが、いつの頃からか、木で箱を作り、その中に保存するようになりました。

湿気に強く、木はだの美しい桐は、小箱に重宝であり、桐畑の多い春日部は、桐小箱の名産地となりました。

江戸時代の元禄期（一六八八年～一七〇四年）に、日光東照宮が造営されましたが、その時に江戸はもとより、京都・大阪からも多くの優秀な工匠が招かれ、東照宮の造営に加わりました。

東照宮完成の後、工匠たちも帰国の途につきましたが、その途中、粕壁宿に多くの工匠たちが泊まりました。

その折、粕壁宿の農民が、農閑期を利用して桐細工をしているのに着目した工匠がおり、粕壁宿に住みつくようになりました。

もとより優秀な技術をもっていた工匠たちは、長持、文タンス、枕箱等を考案し、桐細工を広めました。

後には長持を改良し、タンスを作りあげたと言われています。

幕末には、タンスとともに枕箱・小箱・印籠などの細工が盛んになり、春日部は桐細工の産地として有名になりました。

明治時代になると、春日部の桐小箱は隆盛期を迎えます。

ライオン歯磨本舗が潤製歯磨粉を考案し、湿度保存に適した桐小箱を容器として使用したのがきっかけとなり、と言いつた、といわれています。

桐小箱の用途も多様化し、勲章箱、宝石箱、軸物箱から鯉節箱、カステラ箱などの各種桐小箱や、小引出し箱などが製作されるようになりました。

桐箱以外でも、模型飛行機の胴や翼の骨格となる「リブ」の製作も盛んに行われました。

戦後は技術も改善されて、機械も導入されました。

桐小箱の需要は多くなり、生産量は飛躍的な伸びを示しました。

この頃になると、桐小箱は、室内装飾品としても活用されるようになりました。その種類や数も多く、国内需要のみならず、輸出商品としての需要も拡大され、「伝統工芸品」としての基盤をもつようになりました。

桐小箱に使用する桐材は、大型家具の用材の残木や、枝材などを利用するので、置き場所をあまりとりません。そこで農閑期を利用した家内工業として伝えられ、受けつがれてきた、地場産業の一つです。

製作工程は、「ノコギリ・手カンナ・糊つけ」と、すべて手作りでしたが、現在では機械化され、量産できるようになりました。

※歴史余話についてのご意見・ご批判がありましたら、市史編さん室（〒344 春日部市粕壁東二・二・十九

粕壁小学校第三校舎内 電話 ⑥1 六四四二二）へお寄せください。※¹

なお、春日部市史近世史料編目[※]が近く発刊予定です。ご希望の方は、予約申し込みをしてください。

初出「広報かすかべ 昭和五十六年九月」かすかべの歴史余話

※1 掲載当時のまま作成しました。現在は、ご意見・ご批判を募集しておりません。また、市史編さん室は、春日部市教育センターで活動しております。

※2 昭和五十七年発刊。原本は「春日部市史近世資料編Ⅲ」となっていたのを「春日部市史近世史料編Ⅲ」に修正しました。なお、在庫は文化財保護課（春日部市教育センター内）にお問い合わせください。

（※1、※2とも、平成二十八年十月現在）